
人生アシンメトリー

公彦

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

人生アシンメトリー

【Nコード】

N3105S

【作者名】

公彦

【あらすじ】

貰ったチケットで市内の美術館を訪れた猪狩康平と矢式奈美香。彼らはそこで首が切断された死体を発見してしまう。さらに、死亡推定時刻には美術館は人の出入りが不可能だったことが判明する。何故首を切断したのか。どうやって入り込んだのか。混乱する事件に猪狩が出した答えとは？

登場人物

いかりこうへい
猪狩康平

○大三年

やしきなみか
矢式奈美香

○大三年

ふじいもとき
藤井基樹

○大三年

いかわれいな
新川怜奈

○大三年

てらさかよういち
寺坂陽一

美術館館長

てらさかゆみ
寺坂由美

陽一の妻 副館長

きしよしゆき
岸義行

職員

たはらとしまひら
田原利昌

職員

みまさかゆきこ
美作幸子

職員

にいかわあきとら
新川彰

職員 怜奈の従兄

たかぎけん
高木健

警備員

かとうちよすけ
加藤長輔

警備員

あらいこうじ
荒井康司

警備員

伊勢浩太郎
刑事

第一章 非対称な彼と彼女（前書き）

季節はずれは許してください……。冬に投稿する予定だったんですよ。

第一章 非対称な彼と彼女

1、
「……なあ」猪狩康平はぶつきらぼつに言った。別に機嫌が悪いわけではない、はず。たいてい彼は抑揚のない声で話す、それが普通なのだ。

彼はポケットに手を突っ込んでいる。その方が格好良い、といった小学生じみた考えではない。単純に寒いのだ。

季節は冬。いくら温暖化だの、エルニーニョだの、異常気象だの言っても寒いものは寒い。

いくら積雪量が減ってきているといっても積もるものは積もる。つまり寒い。

とはいえ、やはり年々暖かくなってきているのは事実のようで、歩道こそ雪の白で塗装されているものの、車道は車の熱で雪が溶かされてまだまだ黒い。

クリスマスまでには積もるだろうか。実際、積もらなかったところで全く困らないのだが。

しかし、積もろうが積もらまいが、結局は寒い。何度も言うが寒い。時折吹き付ける風は刃物のように猪狩の頬を切りつける。耳が熱くなっているのがわかる。鏡を見ればおそらく真っ赤になっているのだろう。髪の毛を掻き分けて耳を触ると、やはり熱い。髪を掻き分けたことで気が付いたが、だいぶん髪が伸びてきた。そろそろ切らなくてはいけないと彼は思った。しかし、髪を切ってしまうと風通しがよくなって、余計に寒くなってしまふ。どうしたものか。これだけ言えば察しはつくであろうが、猪狩は寒いのが苦手である。肩も竦めてできるかぎり表面積を減らそうと努力をしている。朝に弱い、寒さに弱いと、まるで駄目な人間だが、猪狩自身は気にしていない。

「何？」大げさなまでに寒がっている猪狩の横で歩いている矢式奈

美香が聞き返す。彼女はというとそれほど寒そうではない。

「俺は美術品とか、全然興味ないんだけど」

「あら、奇遇ね。私もあんまり知らないの」

間髪をいれずにそう切り返す奈美香に猪狩は口を閉ざした。ここまで開き直って言われれば何も言い返すことができない。猪狩は黙り込んだ。そのまま帰ろうかとも思ったが、さすがに彼女の逆鱗に触れると考えると思いとどまった。彼女の逆鱗に触れたところで、あちらにも正当性はないのだが。ところで、竜の鱗が一つだけ逆さまに生えるなんて設定、誰が思いついたのだろうか。

会話もないまま、綺麗に碁盤の目のように整備された道路を歩く。日曜日の午前中、もっぱら人々は駅前に集まり様々な店舗を見て回っているのだろう。一方、彼らはその駅から次第に離れていった。彼らが向かっているのは駅から少し離れたS市美術館である。

「わかったわよ」やや間があつて、奈美香が諦めたように口を開いた。

「何が？」

「訳を言えばいいんでしょう？」

「最初にそれを言うのが普通だと思うけど」

「うるさいわね。怜奈に入場券もらったのよ。親戚にもらったんだつて。けど、怜奈が風邪引いちゃつて。せつかくもらったのに行かなかつたら失礼でしょ？ それであんたがピンチヒッター」奈美香は指を差して言う。

「指を差すな、指を。別に俺じゃなくても……いや、いい」

「だって、友達にこういうの好きそうな人いないんだもの」想像通りの答えである。というより、興味ないと堂々と宣言するのは失礼ではないのだろうか。

「俺も全然興味ないんだけど」

「さつき聞いた」

猪狩は無性に腹が立ってきた。なぜこつも、振り回されなくてはいけないのか。別に藤井でも……、否、彼が美術館でじつと鑑賞し

ている姿を想像できないし、彼と奈美香が二人でいるのも想像できない。東京タワーがS市のテレビ塔の二倍の高さであるとか、スライツリーが四倍であること以上に想像できない。

奈美香は藤井を目の敵にし過ぎのような気がする。別に仲が悪いというわけではないのだろうか。

話を戻すが、なぜ自分が。

「まったく、俺はお前の何なんだよ？」

そう言うのと数歩先を歩いてきた奈美香が立ち止まって振り返る。

怪訝そうに猪狩を見つめると首を傾げて再び歩き出した。

「おい、何だよ」

2、

S市美術館は中央区のビル街の外れに位置し、主に明治以降の地元に関する美術品の収集・展示を行っている。数年前に解体の話があり、取り壊される予定であったが、地元住民の反対があり、民間委譲する形で落ち着いた。そのため、S市の名前はついているが、私営美術館である。

周りはビルで囲まれ、車の量も多いが、ここだけは芝生の前庭などもあり（今は雪に埋もれて見ることはできないが）、都会のオアシスとでも形容できる。

真っ白な壁に合掌造りを進化させたような大屋根、ガラス張りの二階、玄関前には抽象的なオブジェと、何とはなしに近代をイメージさせる建物であった。

「綺麗ね」奈美香が呟いた。それに猪狩も同意する。オブジェはよくわからなかったが。

中に入ると目の前に受付があり、両側には展示室がある。左は自館のコレクションを展示する「常設展」で右が国内外の優れた作品を展示する「特別展」だそうだ。つまり、他の美術館から借りているのだろうか。怜奈がもらってきたのは常設展のチケットだった。

チケットは既にあるので、受付には寄らずにそのまま展示室の入

り口まで行きチケットを見せる。半券を受け取り中へと入った。

日曜日であるにも関わらず、中は閑散としていた。静かに鑑賞する人がちらほら見えるものの、それほど多くはない。採算は取れているのだろうか、などと考える。

一階は主に絵画が展示されていた。おそらく油絵だろう。猪狩にとってはまずそこから怪しい。それほどに美術に乏しいのだ。もしかしたら水彩画かもしれない。水墨画ではないだろう、そのくらいならわかる。

絵によってそれぞれタッチが異なる、ように見える。複数の画家、おそらく同一年代の絵画の特集なのだろう。綺麗だ、と思うようなものもあれば、よくわからないものまで多岐にわたって展示してあった。

一つの作品にかける時間はたいがい人それぞれで、猪狩は奈美香よりも早かったが、先に行ってもどうせ待つことになるので、一枚一枚奈美香のペースに合わせていた。

先へ進むと、途中で螺旋階段があった。先にはまだ展示が続いていたが、ひとまず置いておいて二階へと上がることにした。

二階はうって変わって、オブジェが並んでいた。ほとんどが木彫で抽象的だった。もつとも、「具体的な作品」というのはないのだろうが。どうやら、同一作者の展示らしい。もちろん名前を見てもわからない。もちろん、とつけるのは失礼か。

二階の作品も見終わり、一階へと戻り、それも見終わると一度ホールに出て、今度はホールの階段から再び二階へと上り、ロビーで休憩することにした。二回にはレストランもあり、鑑賞に飽きたのであるう子供がしきりに食事をねだっていた。もうそんな時間だろうかと左腕の時計を見るが、まだ十一時を少し回ったところだった。子供には美術品の価値をわかるにはまだ早いのだろう。人のことは言えない猪狩ではあるが。

二人はソファアに腰掛ける。奈美香が大きく息を吐いた。

「綺麗だったけど、全然知らない人だったわ」

「お前はピカソやゴッホを期待していたのか？」

「うるさいわね。一人くらい知っている画家くらいいると思ったのよ」

「東京に行けば、見れるかもな」

「東京、ね……」そう呟くと奈美香は窓の外に目線を走らせる。

外から見えていたガラス張り。そこがこのロビーである。大きな前庭を望むことができるここは夏ならば緑で覆われていただろう。

もう少し雪が降ってくればそれもまた趣があるかもしれない。残念ながら雪もまばらな今は物足りなさが勝ってしまう。

「康平はどうするの？」

「何が？」

「就活」

東京、という単語で想起したのだろう。

「ああ。……考えてない」

彼らは〇大の三年生である。季節は冬、つまり就職活動が始まっているのである。今日ここに来たのも合間を縫って来たのだ。とはいえ、本格化するのには年を越してからだから、合間を縫ってというほどでもないかもしれない。

「東京行くの？」

「さあ？ まだ何にも。お前は？」

「私は、ちよつと行きたいかなって」

「そう。いいんじゃない？」

「でも、迷ってる」

「珍しいな」

「何が？」

「北海道民は絶対道内に残りたいか、絶対道外に出たいか、のどちらからしいよ」実際、そんなはずないと思いつながら、どこからか聞いた話題を猪狩は話す。

「あんだだって、どっちでもないじゃない」

「ああ、正確な統計じゃないからな。正確な統計だとしても信用で

きないな。血液型で性格が決まったり、星座で運勢が決まったりしないのと一緒にだよ」

「ああ、何かわかる。人間の性格って四種類じゃないでしょ？っていつも思うもの」

「だろ？ 話が逸れたな。何だっけ？」

「就活」

「ああ、そうだ」

「康平は志望業界とかあるの？」

「さあ。ただ、商社とか大手メーカーって柄じゃないな、とは思っけど」

「そうかしら？ 意外とさまになってるかもよ？ ま、営業って柄じゃなさそうだけど。あんた喋り苦手なものね。どっちかって言う事務系っぽい。でも、今じゃどこも営業ばかりよ。どうするの？」

「……別にお前に事務って決められる筋合いはないぞ。というか母親かお前は」実は数日前に母に全く同じことを言われていた。ここまで、コミュニケーション能力を疑われると些か腹も立つてくる。

「お前はどんなんだよ？」

「私？ 私はやっぱりメーカーかな？ 別に金融でもいいんだけど」
「やっぱりの意味がわからん。てか、こんなとこまで来てこんな話したくないな」そう言っただけはため息をつく。それを見て奈美香も苦笑した。

「はは。それもそうね。せっかくだから特別展の方も見ようか」

二人はチケットを買ったために一度階段を下りようとしたとき、どこからか悲鳴が聞こえた。静かだった美術館中がさらに静まり返る。だが、次第にざわつき始める。

「何！？」いち早く反応したのは奈美香である。

「マジ、勘弁」何が起きているか容易に想像ができた猪狩は、誰に言うわけでもなく呟いた。

普通に考えればありそうにもないこと。だが今の悲鳴を聞けばそ

れが一番可能性が高いこと。そういえばいつだったか考えたことがある。呪われているのは誰だ、と。間違いなく自分か奈美香だろうと、認めたくないながらも猪狩はそう思った。

「どこ？」

「たぶん、あっち」猪狩は階段よりも奥にある扉を指差した。「関係者以外立ち入り禁止」の立て札が立っている。猪狩の指した扉を確認すると奈美香が駆け出す。

「おい、関係者以外……」

「そんなこと言ってる場合！？」奈美香は猪狩の制止も聞かずに扉を開け奥へと進んでいく。それを見て猪狩はため息を一つつくとゆつくりと扉をくぐっていった。

3、

扉をくぐると左手に階段があった。それを無視して進むと、左手に通路があったので左に進む。いくつか部屋があった内の、一番奥の右側の部屋の前で女性が尻餅をつき、恐怖を張り付けた顔で部屋の中を見ている。

「どうしたんですか！？」奈美香が尋ねる。

女性は答えなかった。代わりに指を部屋の中に向けて差す。奈美香は駆け寄って中を確認しようとした。覗き込んだところですぐに顔を逸らす。

「見ない方がいいわ」

「それって普通、男の台詞だよな」

「知らないわよ」

「見ないよ」

階段を駆け上がる音が聞こえる。異常に気づいた職員だろう。何と弁解すればよいだろうか。

「どうしたんですか！？ ……君たちは？」四十代か五十代ほどの長身の男性が走ってきた。猪狩と奈美香を見て不審げに顔をしかめる。

「すみません。悲鳴が聞こえたもので……」奈美香が申し訳なさそうに言う。だが、もしかしたら申し訳ないとは思っていないかもしれないと猪狩は思った。最近どうも彼女の身振り素振りに対して疑心暗鬼になりつつある。さすがにあまりよい兆候ではない。もっと、素直に感じ取るのも大事かもしれない。

「寺坂さん!?」男は尻餅をついている女性を見て驚きの声を上げた。「どうしたんですか!？」

女性は首を振るだけで何も言わない。業を煮やした男は猪狩たちを押しつけて部屋へと入る。遅れてさらに三人の職員らしき人たちが階段を上ってきた。

「うつ……」中に入った男は短いうめき声を上げた。「館長……?」「どうしたんですか、岸さん!? あれ? 君たちは?」二十代後半程の男性が、先ほどの男 岸というらしい と同じような反応を示した。

「すみません。悲鳴が聞こえたもので」今度は猪狩が言った。奈美香の台詞の丸写しである。

「……だれか、警察を呼んでください。館長が殺されています」岸が部屋の中から出てきて言った。口を押さえて嗚咽を我慢しているようだ。「誰でもいい。美作、君が行きなさい。君は見ない方がいい」

「は、はい!」美作と呼ばれた三十代ほどの女性が駆け出した。途中で躓きそうになりながら、ふらふらと走っていく。

「おい、ちよつと待て! 館長が殺されたってどういことだ?」最初に来た男と同年代ほどでふくよかな体格の男が不機嫌そうに言う。そして中を確認しようとして前に出て、猪狩を押しつける。猪狩は押されるようになって、一緒に部屋の中に転がり込む感じになってしまった。

「っ!?! ……これは」男は呟く。

猪狩は顔を上げる。

赤い絨毯が敷き詰められた部屋の中は美術品が数多く飾られてい

た。入り口の左右には鎧が、右の壁には絵画が三点、左には二点飾られ、奥の角には左右とも棚の中に工芸品と思われるものが多数入っていた。

天井を見渡せば、小洒落た照明が部屋を照らしている。部屋の端から端まで伸びている暖房用の太いパイプが悪目立ちしていた。おそらくこの部屋の持ち主はどうにかしたかったに違いない。

こんなことを考えているのは現実逃避に他ならない。

部屋の中心にはテーブルとソファ。いずれも高級品に見える。ドラマの社長室などに置いてありそうである。その奥には机が。

そしてテーブルの手前には血まみれの剣が。男の体が。その首が見たくなかったのに。猪狩は思った。

4、

「また君か」

現場に到着した伊勢浩太郎の第一声である。

「あの、その目暮警部みたいな言い方やめてもらえますか？」猪狩はできる限り迷惑そうな顔を作った。伊勢はその猪狩の表情を見て肩を竦めたが、何も言わない。

「伊勢さん、お久しぶりです」奈美香が礼儀正しくお辞儀をする。

「久しぶりってことは平和だったことだね」

三人はこーい・二年で頻繁に会うようになった。と言うのも、猪狩と奈美香がよく事件に遭遇し、伊勢が刑事であるという単純な仲である。だが、猪狩が事件を解決することが多く、それ以上の関係にはなりつつある。

「平和になったら、私たち、会えなくなっちゃいますね」

「まあ、そうでしょ。その方がいい」伊勢は片手を挙げて部屋へと入っていった。

二人は一階の事務室へと通された。無断で入ったとはいえ、この状況で美術館側も邪険に扱うことができなくなったのだろう。事務室の応接用のソファに案内され、先ほどの若い男がお茶を運んでき

てくれた。男にしては背が低く、ビジネスショートというか、前髪を上げた短髪で爽やかな青年である。

「あ、ありがとうございます。えっと……」

「ああ、新川です。新川彰です」彼自身は向かいのソファには座らずに、立ったまま自己紹介をする。

「あ、それじゃあ、怜奈の従兄さんですか？」

「え？ 怜奈の友達？」新川は目を丸くした。急にケント・デリカツトが思い浮かんだが、彼ほどではない。

「ええ、大学で一緒なんです」

「へえ。え、じゃあ、怜奈も来てるの？ チケットあげたから。あれ、でも三枚もあげたかなあ？」

「風邪引いちゃって……。来たがってたんですけど」

「ああ、そうなの。今の展示会は今日が最終日だからね。仕方ないか。お大事にして言っておいてよ。はあ……これから大変そうだな」そう言つて新川は去つていった。

奈美香はお茶を一口するとため息をついた。

「新川さんが犯人じゃなきゃいいけど……」

「犯人だといいつて人はあまりいないと思うけど」

「あのねえ……。はあ、あんたと話すると疲れるわ。それより、変じゃない？」

「何が？」

「この事件がに決まつてるでしょ！」

「変なことだらけだよ」

「真面目に考えてる？」

「真面目に考える必要はないと思うけど、真面目に答えてるよ」

「じゃあ、言つてみなさいよ」

「場所がおかしい。関係者以外立ち入り禁止の場所で犯行を行うなんて、自分は関係者ですと言つてるようなものだ。もちろん、俺たちだって関係者以外で、ここに入ったわけだけ。あと、犯行時間が長すぎる。見たところ現場に血はそれほど吹き出てなかったから、

死後数時間たつてから首を切ったということになる。ってことは、血が固まるまでその場で待っていたか、血が固まるころを見計らって戻ってきたか。それと、そこまでして何のために首を切断したのか

「わかつてんじやない」

「首を切断した理由も大体は想像つくけど」

「言ってみなさいよ」

「今度はそつちの番」猪狩はお茶に口をつける。熱い。思わず顔をしかめた。

「いいわ。本来、というか、小説でよく見られる首の切断っていうのは、基本的に被害者を誤認させるため。つまり、顔がわからないから、服装で判断させたりして誤魔化すわけよ。ただ、その為には首を持ち去らなきゃいけないし、最近の科学技術でDNA鑑定なんて出てきたから、この手は使えないわ。今回はそうじゃない」

「御託が長い」

第一、小説の話を”本来”というのは正しいのだろうか。

「つまり」猪狩を無視して奈美香は続ける。「そういうことをなしに、リスクを承知で首を切らなきゃいけなかったのは、首に何かあったからと考えられるわ。死後に切断されたとすれば、理由は簡単よ。おそらく死因は窒息死、さらに言えば絞殺。で、首を切ったのは絞殺痕を消したかったからよ。たぶん、今の科学技術なら、絞殺痕から犯人の身長くらい割り出せるでしょうから、それを何とかしたかったのね。ってことは犯人はとても大きかったり、その逆だったり特徴的なんでしょうね」

「絞殺じゃ身長はわからないよ。でも、よく考えるね」

どこからか拍手が聞こえてきた。あたりを見渡すと伊勢がこちらに歩いてくる。

「扼殺だと、指の大きさから身長を割り出せるんだけど、ロープなどによる絞殺だとたいして角度も変わらないからね」

「あ、そうなんですか？」

「うん。だいたい、絞殺だと首に対して水平になるね」

「へえ。他に何かわかったことは？」

「例によつて僕の立場上詳しくは言えないよ」

「今は、ですよね？」

「君のこと嫌いになつてもいいかい？」伊勢は苦笑する。

「やめてくださいよお」対して奈美香は笑顔で受け答えた。

「まあ、言えない代わりと言つちやなんだけど、君たちはもう帰つていいよ」

「え？ いいんですか？」

「いいよ。君たちは犯人じゃないつてほぼ決まつてるから」

「うわあ、何か推理小説の主人公みたいですね！」

「僕は読まないから知らないけど」

「面白いですよ。読んでみたらどうですか？」奈美香は上品に首を傾げて伊勢に尋ねた。

「本物の警察官に作り物を薦める？」

5、

「落ち着きましたか？」伊勢は穏やかな声で尋ねた。

「……はい。すみません」寺坂由美は俯きながら答えた。

ここは事件現場の隣の部屋である。今は特に使われてないらしく、丁度よく長机とパイプ椅子があつたため使わせてもらっている。テーブルの上には部下の池田が下の事務室からもらつてきたコーヒーが置いてあるが、彼女は全く手をつけていない。

池田はといえば、伊勢の後ろでそわそわとしている。何をしているんだ。

「話しづらいとは思いますが、ご主人を発見したときのことをお聞かせ願えませんか？」

しばらく寺坂は黙って俯いていたが、やがて微かな声で話し始めた。

「こここの隣で作業をしていたんです。二階倉庫の目録の整理です。

主人はたまに館長室に籠もって仕事をしていたので、一度も顔を合
わせてなくても不思議ではありませんでした。ですけど、主人に聞
きたいことができず、部屋に行ったら……」

寺坂が黙ってしまったので、しばらく間をおく。その間も池田は
拳動不審に体を揺らしている。

「朝は、ご主人の方が早いですか」

「いえ、主人は泊まっていったんです。あの部屋の美術品は全て主
人の私物なんです。家に置いておくより安全だからって言って。そ
れをゆっくり見たくて、たまに泊まっていくんです。ソファで寝る
のは体に悪いから止めるよう言ってたんですけど」

「朝も挨拶なしで？」

「ええ。一度仕事を始めたら本当に籠もりっぱなしで、邪魔するの
も悪いので、主人が下の事務所に下りてくるまでは特に挨拶には行
かないんです。今日は私が二階に行くことになりましたけど、仕事
中でしたから」

「あなたが出勤したとき、誰が来ていましたか？」

「ほとんどです。ちよつと来るのが遅かったので。誰が来てなかつ
たかは特に見ていませんでした」

「何か、気づきませんでしたか？」

「いえ、特には。……あの？」寺坂は伊勢の肩越しに何かを見てい
る。伊勢が振り向くと池田を見ているようだった。

「あの……トイレは……？」

こいつは……。それで先ほどからじつとしていらなかったのか。
「あ、部屋を出て左を行って、突き当りを左です」寺坂がそう言う
と池田は礼を言って駆けていった。もう少し仕事だという自覚を
持てないのだろうか。寺坂にため息と思われないように大きく息を
吐いた。

第二章 非対称な思考と行動

1、
新川彰はいつもの通勤の道をいつものように歩いてた。だが、いつものような気分ではさすがにいられなかった。

いつものように裏口に回り、いつものようにそこから事務室へと向かう。だが、さすがにその心内は重い。

「おはようございます」入り口で皆に向かって挨拶するが、いつもよりもやや声のトーンが落ちていることを自覚する。それに対して返ってくる声も心許ない。

皆、一緒なのだ。自分の職場で、自分の上司が、さも無残に殺されてきた。これで、平常でいられる方がどうかしている。

「おはようございます、美作さん」新川は隣の席の美作幸子に改めて挨拶する。

「あ、お、おはよう。新川くん」美作はおどおどした様子で返答した。だが、これは事件の影響ではない。彼女は常からこうなのだ。自分より七、八ほど年上のはずだが、その振る舞いは社会に出て十年以上経つてとは思えないほど拙いものだった。化粧も薄く、冴えない顔で、おそらく自分に自信がないのだろうなという印象を日ごろから受けている。

もし、この美術館でリストラが行われるとしたら、真つ先にクビを切られるのは彼女だろう。考えるまでもない。もつとも、彼女が真面目に働いているのを知っているため、個人的には応援していた。だが、何にしるクビにする側の人間がもついないのだ。

「……この美術館、どうなるんですかね？」彼女に尋ねて妥当な答えが得られるとは思えなかったが、社交辞令で尋ねた。案の定、彼女はあたふたとした反応を示し考える仕草をした。

「ど、どうだろうね。由美さん、が続けるんじゃない？」

寺坂由美。この美術館の副館長で、被害者の寺坂陽一の妻である。

今回の事件の第一発見者でもある。だが、経営が苦しくても美術館の継続の道を模索していた館長と比べ、彼女はそれほどこの美術館に執着があるようには思えなかった。

別に反対をしていたというわけではなく、ただ、館長に任せていた、というのが正しい。つまり、もし彼女が館長になるとすれば、何もなければ続けるし、閉館の声が上がれば閉館する、そうなるだろう。経営が悪い以上、ここを続けていく合理的な理由は特にない。「どうですかね？ 新しい働き口を探さなきゃいけないことにならなければいいですけど」新川はため息混じりに言い、机の上の書類に目を通し始める。

「そう、だよな。ここが、な、なくなっちゃうかもしれないもんね」「ええ。あ、そろそろ仕事したほうがいいですよ。岸さんが見てますから」岸が二つ向こうの机からこちらを睨んでいた。そう言うと、彼女は跳ね上がるように肩を震わせた後、慌てて机に向かい始めた。もし、岸が館長になることがあれば、彼女はそれこそすぐにクビになるだろうな、と思った。

廊下を歩いていると、ロビーと繋がっている扉が無造作に閉まる音がした。欠伸をしながら警備員が歩いてくる。まだ二十代の若い警備員で、高木健という。短髪で堀の深い顔は高校球児を思わせる好青年に見えるが、話すと必要以上にフランクで、調子のいいことも言えば、仕事の文句を言ったりする、そんな人物である。

「お疲れ様です」新川は挨拶する。他の警備員と話したことはないが、彼だけは年が近いこともあって、何度か話したことがある。

「ああ、お疲れ様です」高木はもう一度欠伸をして会釈した。「夜勤、ですか？」聞いてから、夜勤がこんな時間まで勤務していることは有り得ないと気が付いた。もう既に日は上がりきっているのだ。

「いんや。ちょっと、警察の仕事に付き合わされましてね。その後の勤務っすよ。ああ、しんどいしんどい」高木は首を回したり、

肩を上げ下げして凝りをほぐそうとしている。「ああ、非番だったのに」

「警察の仕事、ですか？」

実際の年齢は知らないが、おそらく高木の方が年下だろうと思いつつ、彼の軽口にはもう慣れてている。そして、こちらが敬語を使ってしまうのは、年上ばかりの環境に慣れてしまったからである。

「そうつすよ。防犯カメラの映像で、怪しい人が映ってないか探さんです。非番の人がやるしかないでしょう？」

「ああ、なるほど。で、映ってたんですか？」

「全然ですよ。だから大変だったんすよ。映像見て、この人はいつ入って、いつ出たかって、服の特徴見ながら、ちまちまちま……。だいたいは警察の人がやってたんすけど、僕もその場を離れられなかったんで」

「それでも見つからなかったんですか？」

「ええ。だから、前日に隠れてたつてのはないみたいつすよ。そもそも、加藤さんも荒井さんも何も見てない聞いてないつて言ってるんすよ。十二時頃つて言ったらちようど見回りの時間すから」

加藤とはここの警備員で一番年長の者である。荒井も年配の警備員である。どうやら彼らが事件当時の当直だったらしい。そして話が抜けているが、どうやら十二時頃が犯行のあった時刻のようだ。

「加藤さんが見回りして、荒井さんが警備員室にいたんですけどねあの二人、真面目だから手え抜かないつすよ」

「二人をかいくぐつて入り込むつてのいうのは無理ですか？」新川は尋ねた。ところで、彼は手を抜いているのだろうか。

「無理じゃないすか？ ほら、入り込めそうなところつて事務所の窓くらいでしょう？ 事務室つて警備員室のまん前だから。寝てない限り音で気づきますよ」

「そうですね。すみません、疲れてるのに邪魔してしまつて」新川は頭を下げる。高木はいえいえ、と欠伸をしながら事務室前の警備員室に入つていった。

この時期となると日が落ちるのはとても早い。たとえ定時で帰ることができたとしても、既に外は真つ暗、なんてことは当たり前である。オレンジ色の街灯に照らされて、新川は帰路に着いていた。駅でふとあるケーキ屋に目が止まる。そういえば、妻が何やら騒いでいた店がこんな名前だった気がする。妻と娘の分を買っていつてやろうかと考えた。時たま、こうやって特に何も無い日でもお土産を買いたくなくなるときがある。

だが、今自分が置かれている境遇　つまり、いつ職を失うかわからない　を思い出し、思い悩む。さすがに、市民の反対で存続した美術館が、館長がいなくなっただけで閉鎖するとは思えないが、そうでなくても無駄遣いはよくないと、自分に言い聞かせて買うのは控えた。

長い帰宅時間だった。彼の家はS市の隣のE市である。といつても数百メートル先はS市なのだが。彼が家の前に着いたときには事件のことが頭を埋め尽くしていた。どうやら、事件当夜は誰も出入りしていないらしい。少なくともカメラには映っていない。だとしたらどうやって犯人は館長の部屋までたどり着いたのだろうか。

何とも、小説のような話だが、こういった事件はよくあることなのだろうか。警察ならばこの程度の奇妙さは日常茶飯事なのだろうか。警察ならば解決できるのだろうか。そんな思考の堂々巡りである。

「お帰りなさい」

家に入ると妻の香代が夕食の用意をしていた。結婚四年目、娘が一人。割と順調に思えた人生も雲行きが怪しくなってきた。

事件のことは香代に話したが、さほど心配していないようで「べつに潰れたりしないでしょ？」と言っていた。そのときは誤魔化して答えたが、実際にあの美術館を続けられると思っっているのは館長くらいではないだろうか。もちろん、誰も潰れればいいとは思ってはいないだろう。単純に職を失うのが怖いのだ。愛着はあれど、続

けたいと思っけていても、続けられるかどうかは別問題なのだ。

「桜は？ もう寝た？」コートを掛けながら新川は尋ねた。

「寝てるよ。けど、たぶん起きる。夕食まだだから。ああ、そういえば、誰だっけ？ あの、従妹の」台所から香代の声が聞こえてくる。

「誰？ 美緒？ 恵理子？ 怜奈？」

「ああ、そう怜奈ちゃん。電話来てたよ」

「怜奈？ わかった」電話のところまで向かい、電話帳から彼女の家の番号を探す。まだまだアナログだなあと思いつつ、番号をプッシュする。しばらくした後、女が電話に出た。

『はい、新川です』電話の嫌なところは顔が見えないところである。特に叔母の和江と従妹の怜奈は声が似ていて電話だとよく間違えてしまう。どちらだろうか。

「あ、彰です。E市の」

『ああ！ 彰さん。怜奈です、こんばんは』

「こんばんは。どうしたの？ 電話くれたみたいだけど」

『あの、せっかくチケットくれたのに、風邪引いちゃって行けなくて。謝ってなかったなと思って』

「全然いいのに。わざわざそんなことで電話してくれたの？」

『ええ。あと、何か大変だったみたいですね』

「そう、知ってるんだ？ まあ、大変だよ。この先どうなるかわからないしね」

『そうなんですか？』

「うん。あんまり採算取れてなかったから。その辺は偉い人たちでどうにかするでしょ。まあ、とにかく、今は早く犯人が捕まっけてほしいよ」

『捜査はどうなんですか？ あ、まだ始まったばかりですね』

「昨日の今日だからね。ん？ 一昨日か。けどね、何か大変みたいだよ。小説みたいになっけてる」

そう言っけてから怜奈からの返答はなかった。どうしたのだろうか

と思い、声を掛けるとややあつてようやく返事があつた。
『あの、いい人紹介しましょうか？』

2、

今年は近年続く傾向どおり、例年より（近年続くとなると例年とは何を基準に言っているかよくわからなくなるが）雪が少ない。普通なら真つ白であるはずの〇大には黒が目立っていた。道路が露出しているための黒もあるが、もっと目に付くのは人の黒である。

毎年十月から三年生は就職活動が始まる。東京はもっと早いらしいが知ったことではない。ここは北海道だ。十月、十一月と流されるままに動いていた者たちもそろそろ本腰を入れ始めたところである。中には年が明けてから動き出す者もいるようだが。

そんな者たちが学内セミナーのために黒いスーツに身を包み登校してくるのだ。

「なあ、どこ行く？」おそらく学校一スーツが似合わないであろう藤井基樹が尋ねてきた。彼に似合うのはどう考えても運動に適した服装である。ある意味ジャージが一番似合うかもしれない。

〇大の学内セミナーは複数の企業が一日に訪れ、その中で三つほどを自分で選び説明を受ける形式である。すべての企業を見ることのできるわけではない。

「ん。三丸地所かな」二人で階段を上がりながら猪狩は答える。

「それより北優銀行行こうぜ」

「金融興味ない」猪狩はパンフレットに目を向けたまま答えた。この時期には友人と行動したがる学生が多いと先日のセミナーで、ある企業の人事が半ば文句のように言っていたのを猪狩は思い出した。友人と同じ企業に行くわけではないのだから、自分の行きたいところに行けば良いのだ。逆に言えば行きたくない企業には行く必要はない。

「ちえ。じゃあ、また後でな」藤井はそう言って二階の教室へと向かっていった。彼はそのあたりをまだ理解していないようだ。猪狩

はそのまま三階へと向かう。

「ちえ、とか死語だよな……」

目的の教室へと入ると、見慣れた顔を見つけた。新川怜奈である。余談だが、この時期になるとやたらと見慣れない顔が増える。二年半同じ大学に通っていたはずなのに、初めて見る顔も多い。学科が違う、授業でも会うことのなかった学生もセミナーという同じ空間に集まるためであろう。今まである意味では風景と捉えていた他人が、同じ格好をしているためしつかりと認識するというのもあるのだろう。その中で見慣れた顔を見るのはウォーリーを見つけたときのようなちよつとばかりの嬉さがある。

「あ、おはよう。猪狩くん」怜奈は笑顔で挨拶すると隣に置いてあった鞆を退けた。「この間は大変だったんだって？」

事件が起こってから三日が経過していた。今のところ伊勢からの連絡はない。本当に自分たちを特別扱いしているようだ。そして頼る気もまだないらしい。猪狩としてはその方がありがたかった。

「ああ。奈美香が喜びそうな話だ」

「そんな風に言ったら奈美香に失礼だよ。空気ぐらい読めてるよ。殺人事件で喜ぶはずないよ」

「それくらい気遣いがあいつにも欲しい」

「で、どうだったの？」

「……前言撤回」

「嘘うそ」怜奈は舌を出して笑った。「彰さんから少しは聞いたんだけど」

「そっぴいや従兄妹だったな」

「うん。館長さんが亡くなっちゃったから、あそこがどうなるかも怪しいんだって」

「奥さんはいないの？」

「あれ？ 奥さんが見つけたんじゃないか？」

「ああ、あの人がそうなのか」

「寺坂さん」

「そんな名前だった気がするな。奥さんが館長だったりはないの？」

「うん。そこまで熱心だったわけじゃないみたい」

「じゃあ、なくなるかもしれないのか？」

「あるかも。あんまり採算も取れてなかったらしいから。努力はしてるみたいけど」

そう言われて、当日客が疎らで閑散としていたのを思い出した。市民の反対で存続が決まったのに、その市民がそこを利用しない。何とも理不尽だと猪狩は感じた。

時間になり企業の説明が始まったので、猪狩はそちらに集中しようとしたが、怜奈が再び話しかけてくる。

「あのね……」

3、

「……誰かの悪意を感じるな」猪狩はその場にいない第三者のことを言うように、その場にいる奈美香を非難した。

「さて、何のことやら。私たちは新川彰さんに呼ばれただけよ」

「うん。呼ばれた。是非猪狩くんを連れてきてくれって」怜奈も奈美香に同調する。

「藤井は？」

「あいつはいらないでしょ」即答、である。

「っていうか、バイトだって。一応呼んだんだけど」

「一応、ね……」猪狩は藤井の待遇の悪さを不憫に思った。

日曜日（つまり、事件からちょうど一週間が経った）三人は新川彰の自宅に向かっていた。彰によると、警察の捜査はさほど進んでいないらしい。全くのゼロというわけではないのだが、ある点が決定的な壁になっているらしい。自分の職場の館長が殺されたとなれば、一刻も早く犯人を見つけ出してほしいものだ。

そこで、何度か殺人事件を解決したことのある猪狩の知恵を借りたいのだとか。なぜ彼がそのことを知っているのかと言えば、もち

ろん新川怜奈のせいであり、それを積極的に唆したのはやはり矢式奈美香に他ならないだろう。

となれば藤井が必要にならないのは残念ながら必然である。どうせなら自分も必要なかったらよかったのに、と猪狩は思った。何度事件を解決しようが、殺人事件に首を突っ込むなんて不謹慎極まりないのだ。

三人は電車に乗る。対面式の車両で猪狩は進行方向に背を向ける形で座ることになった。この向きだと若干酔いやすいのだが、女性二人には一応気を使わなくてはなるまい。

奈美香と怜奈が二人でお喋りに興じている間、猪狩は一人物思いに耽っていた。また、面倒なことになったと。

いつだったか事件を呼び込んでくる疫病神は誰かと考えたことがある。

一度目は藤井が言い出した。怜奈が場所を用意した。

二度目も藤井が言い出した。

三度目は奈美香だ。

四度目は誰でもない。強いて言えば自分ということになるだろう。だが、自分の知らないところで奈美香も巻き込まれたようである。

今回は奈美香が言い出したが、チケットは怜奈が用意した。

こう考えると自分は完全にとぼちりを受けているだけのように見える。自分は引き金を引いていない。だが、五回すべてに関わったのは自分と奈美香だけである。

そう考えると、自分が誰かに引き金を引かせていると考えられなくもない。まるで小説や漫画の主人公のように事件に吸い寄せられている。

「……はっ」

そこまで考えて馬鹿馬鹿しいと一蹴する。誰が疫病神だろうが、誰がとぼちりを受けていようが、結局は無意味に等しい。

確かに呆れるほどの事件との遭遇率は迷惑極まりないが運が悪い

としか言いようがない。

誰の運が悪かろうと、四人でいれば四人が事件に遭遇する。諦め、とはまた違うが、誰が、を探したところで何の意味もない。

「何よ、気持ち悪い」奈美香が気味悪そうに猪狩を睨んでいた。

「別に。そろそろ着くんじやないか？」停車駅を告げるコールを聞いて猪狩は立ち上がった。

駅を降りてさらにバスで三十分、住宅街に入った。真新しい立派な建物が目立ち、道路脇には冬でも枯れない針葉樹が植えられていて、真つ白い傘を被っている。立派な家が多いのは交通の便が悪く土地代が安いからだろう。新興住宅街の道理である。

「やあ、いらつしゃい。待ってたよ」新川彰が笑顔で出迎える。

「お久しぶりです、彰さん」怜奈も笑顔で答える。

家の中は新築のようで新しく、家具も必要最低限のものしかなかったが、綺麗に纏まっており、モデルルームのような雰囲気だった。彰の妻の香代がお茶を淹れてくれた。

ソファが一つしかないのでそこに三人を腰掛けさせ、彰自身は床に胡坐をかいて座った。

「いやあ、怜奈ちゃん、元気だった？」

「ええ、忙しいですけど」

「そっか、就活だもんね。これから大変だよ。がんばってね」そう言っつて彰は台所にいる香代を一瞥し、こちらを向いていないことを確認して声を潜めた。「あんなことが起こっちゃって、俺も就活しなきゃいけない、なんてことにならなきゃいいけど……」

「あの、あれからどうなったんですか？」

「俺も詳しい話は聞けなかったけど、警察の話をもとめると、館長の死因は窒息死、つまりおそらく絞殺。で、死後数時間経ってから首を切られたらしいんだ」

「私たちの予想通りですね」

「あそこに鎧があったのを覚えてる？」

「えと……」

「はい、覚えてます」言いよどむ奈美香に代わって猪狩が返事をした。

「あの鎧が持つていた剣で切ったらしいんだけど、無茶苦茶。無理矢理やったもんだから、断面はぐちゃぐちゃ、絞殺痕も見つからなかったらしいよ。素人が人の首を切断するってのは思ってる以上に難しいらしいね」

「飾りなのに刃を落としてなかったんですか？」

「うん。館長の趣味だろうね」

「そんなに酷い断面だったんですか？」

「見てないけど、聞いた話だとね。絞殺痕もないから、おそらく絞殺、としか言えないって言ってたよ」

「そうですか……。最初は、そうやって絞殺痕をわからなくして、身長割り出しとかをできなくするのが目的だと思っただけですけど、実はできないらしいんですよ」奈美香は腕を組んで考える仕草をした。「そういえば、あんたも何か考えがあるって言ってたわよね？」
「簡単だ。犯人がそのことを知らなかっただけと考えるのが一番納得がいく。防犯カメラはなかったんですか？」猪狩は淡々と答え、新川に尋ねた。

「あつたよ。もちろん。けど、むしろそれで苦労してるみたい」

「どういうことですか？」奈美香が興味をそそられたようで食いつく。

「防犯カメラは、展示室のほかには、入り口と裏口に設置してるんだけど、誰も映ってないんだ」

「え！？ そんなことあるんですか？」

「俺もちゃんと聞いたわけじゃないけど、聞いたところによると、犯行時刻は夜中の十二時頃なんだ」

「その頃には誰も映っていない……？」

「そう。怪しい人物なんて誰も」

「前の日からどこかに隠れていたんじゃないんですか？」

「警察と一緒にカメラを確認した警備員さんが言ってただけど、

それはたぶんないって。前の日も、次の日も、服の特徴とかから全部確認したらしいから。第一、夜間は計三回の見回りをするんだ。それをかいくぐるのは難しいと思うよ。まあ、見回りするといって展示室の方がメインだから、不可能じゃないんだろうけど。あ、でもスタッフルームの方も警備員室に一人いるんだけどさ」

「うーん。あ、そもそも館長はなぜそんな時間に？」

「あの部屋、美術品だらけだったでしょ？ たまにあの部屋で一晩過ごしたりするって、奥さんが言ってた。美術品に囲まれて一夜を過ごすんだってさ。警備員さんもわかってるから、別に気にしてなかったらしい」

「……どう思う？」奈美香が猪狩に尋ねる。

「怪しい人物はいるはずがないと思う」お茶をすすりながら猪狩は答える。熱い。

「どういうこと？」

「言わない」猪狩がそう言うのと奈美香が睨んできた。それを無視してもう一口お茶をすする。無視するがためにお茶を飲んだが、やはり熱い。もう少し冷めてくれないと飲みづらい。

「俺は構わないよ」何かを察したのか真剣な表情で彰が言う。

「……単純に、場所を考えれば職員やその他の関係者以外には考えられないというだけです」

「……だよ。みんないい人だと思ってたんだけどな」彰は顔をしかめて言う。

「職員の人たちは全員朝に来たんですか？」

「そう聞いたよ。さっきも言ったけど、カメラを見る限り前日から籠っている人はいなかったらしいから。職員も一緒さ」

「どこか出入りできそうな窓とかありませんか？」

「事務室の窓なら外に出られると思うけど、高いんだ。飛び降りれないほどじゃないけど、入るのは難しいと思う」

「無理なんですか？」

「背が高くないとね。それに窓を出て行った後に窓を閉めるのも、

高さからして難しい。できなくはないけど、少なくとも鍵は掛けられないよね」

「後で閉めればいいんじゃないですか？」

「……そうなるとできるのは岸さんしかいないよ」

「岸さん？」

「最初に館長を見つけたときにいた人だよ。背の高い」

「ああ……。僕を突き飛ばした人じゃない方ですね」

「そう、君を突き飛ばしたのは田原さん」

「で、岸さんしかできないっていうのは？」

「背が高いつてもあるけど、僕が来たときにいたのは岸さんだけだったからさ」

「そのとき窓は？」

「閉まっていたよ。ちよつと寒くて、どこか窓が開いてるんじゃないかと思つて確認したからね。まあ、単に暖房を入れたばかりで暖まつてなかったただだったんだけど。」

「じゃあ、岸さん以外は犯行は不可能なんだ……」

「警備員が犯人じゃなければ」猪狩が言った。

「自分が一番疑われやすいのに、そんな時間にする？」

「しないと思う。けど、だからこそしたのかも」

「それに警備は二人体制だったんでしょ？」

「二人が共犯という可能性をすてちゃいけない。むしろそれが合理的だ」

だいぶん冷めて丁度よくなつたお茶を猪狩をすすつた。

4、

なんとも世の中は狭い。猪狩は学外の企業セミナーに出席していた。その帰り、街を歩いている人物で知っている者がいた。

「こんにちは。伊勢さん」

「おつっ！？ びっくりした。君か」伊勢は横から話しかけられて飛び上がるようにしてこちらを向いた。「話しかけられたのもびっ

くりしたけど、君の格好もびっくりだね。どうしたの？ スーツなんて着ちゃって」

「就活ですよ」猪狩は短く答える。

「ああ、もうそんな時期か。大変だね」

「他人事ですね。その言い方」

「事実でしょ」

「ええ、まあ。事件の方はどうです？」

「おっと。今回は君には頼らないよ」そうは言っているものの、表情は硬い。

「進んでるんですか？」

「……進んでないよ」硬かった表情がますます硬くなる。そういえば硬くなることしかできないポケモンが昔いたな、と思った。

「そうですか。じゃあ……」伊勢はどちらだろうと考えながら猪狩は踵を返す。

「あー、時間があつたら軽くなんか食べないか？」伊勢が苦笑気味に猪狩を引き止める。素直にそう言えばいいのに、と猪狩は思ったが、期待されても困る。内心で苦笑した。

二人は駅前のドトールに行くことにした。適当に席を見つけて、コーヒーとミラノサンドを注文した。

「カメラのせいでややこしいことになっているらしいですね」

「別にカメラのせいって訳でもないけど……まあ、犯行は不可能だったと言わざるを得ないね。なにせ誰も入っていない出ていない。少なくとも関係者はきつちり朝に来てる。だいたい開館一時間前から三十分前くらいまでだね」

「カメラのデータが改ざんされたってというのは？」

「ないとは言い切れない。今調べてるところだけど、それができるとしたら結構な技術者じゃないかな？ 痕跡を消せる、ということまで含めてだけ。警察が調べてすぐわかるようならたいしたやつじゃない」

「……結構な技術者だったら、もう完全犯罪ですね」

「まあ、痕跡つてのは残るものだから、この方法は使っていないと思うけど。第一、この方法を取ったとしたら、警備員以外有り得ないし、警備員だったら、わざわざそうする必要がない。外から回線をジャックしたなら別だけど。ルパンじゃあるまいし」

「ああ、そうだ、美術館の警備員は？」

「何も見てないし聞いてないって言ってる。事務室の窓から入ってきたのなら気づいたはずだって言ってるよ」

「じゃあ、その警備員自体が犯人っていう可能性は？ 確かに警備員ならデータの改ざんなんていらないですよね」

「なきにしもあらずだね。ただ、自分しか疑われない状況にあるわけだから。しかも、窓からの侵入はないって言っちゃってるから。彼が犯人なら、その辺を有耶無耶にするだろうね」

「でしょうね。けど、彼らは職業柄、その辺は断言しないとイケない事情もありますけどね。……あと、動機的に怪しい人物はいないんですか？」

「動機だけなら、いるよ。まず岸義行。まあ、要するにお金がらみのトラブルってやつだよ」

「借金、ですか？」

「いや、経費の着服が疑われてる」

「わかりやすい」

「ま、殺したからといって疑いが晴れるわけじゃないけど。少なくとも、最近の二人の関係はあまりよくなかったらしい」

「へえ。……あとは？ まず、つてことはまだいるんでしょう？」

「後は、うん。いないわけじゃないけど。美作幸子。リストラの最上位リストだったらしいよ。真面目なんだけど仕事ができないって評判らしい。何度も館長に雷を落とされてるのが目撃されてるし」

「……それだけで？」

「だから言っただじゃん。いないわけじゃないけどって」

「わかりました。それだけですか？」

「それだけだね。ああ、あと状況だけ見れば妻の寺坂由美。動機は

よくわからないんだけど、陽一の保険金が増額されてた」

「めっちゃ、怪しいじゃないですか」

「けどねえ……。増額されたのは一年以上前なんだよ」

「怪しまれないように待ったんじゃないですか？」

「それに、額もたいしたものじゃない。あ、いや。そりゃ生保だし、増額してるから結構な額なんだけど。それ目当てに殺すなら、もつと掛けるね僕なら」

「それも怪しまれないように……。割りに合いませんか」

「ああ、僕ならやらない」

「いくらですか？」

「教えない」伊勢が片目を瞑って笑って見せた。

「……本人は何て？」

「もしものために、だそうだ」

「夫婦仲自体はどうなんですか？」

「外面はとてモいい。けど実際は知らない」

「そうですか」

「今のところ怪しいのはその3人くらいかな。それじゃ、そろそろ仕事に戻るよ」伊勢は勘定を持って立ち上がった。猪狩が財布を取り出したがそれを制する。

「ご馳走様です。それじゃ。頑張ってください」

頼らないと言いながら、ほとんど喋ったな、と思った。

第三章 非対称な想いと素振り

1、
「うーん。首のない死体ならやっぱエジプト十字架でしょ」

奈美香は中井夏美の部屋で彼女のベッドに腰掛けて言った。

中井夏美はH大の三年生で、去年の夏に知り合った。互いにミステリー好きということで意気投合し、ちよくちよく彼女のアパートにお邪魔している。

「うわあ、王道だねえ」中井は本棚から何かを探そうとしている。

「何、悪い？」奈美香は頬を膨らませて抗議する。その表情を見て中井はケラケラと笑った。それを見てもますます奈美香は機嫌を悪くしていく。微笑ましい悪循環である。

「いやあ、ごめんごめん。別に王道が悪いなんて言っていないじゃん。あ、これこれ」中井は本棚からお望みの物を見つけそれを投げて奈美香によこす。奈美香はそれを慌てて捕って、拍子に折れてしまわなかったか確認するとほっと一息ついた。

「有栖川？ こんな作品あったっけ？」

「知らないか。シリーズ外だからね。首のない死体だと私はそれが好き」

「え、これを渡したってことは読めってこと？」奈美香は眉を吊り上げる。見せてくれるのはありがたいが、あいにく読む時間がない。彼女も三年生なのだからわかってはいるはずだ。自己分析をしたり、業界研究、企業研究、SPI対策もしなくてはいけない。

「いや、何となく。読みたかったら持つてっついていいよ」
「読んじやうとハマりそうだからやめとくわ」

就職活動はまだ本格化していないので、時間がないわけではなかったが、一冊読むとまた別の本が読みたくなり、とどんどのめり込んでしまう。彼女はその本をベッドの傍らに置いた。そして、足を投げ出してベッドに寝っころがった。他人のベッドだが、中井な

ら文句は言わないだろう。

「どっち道ね、首は切断されてるけど、その場に残ってるのよ」

「何が？」

「この前の事件」

「ちよつと待って、聞いてないって！ また？ ああ、だから急に首のない死体とか言い出したの。何々？ 何だったの？ ああ、ちよつと待ってね。お茶出すから」早口でまくし立てると中井は台所へと向かう。

「うん。夏美を見ると、不謹慎だつて言われてる私もまだマシなんじゃないかと思えるわ」奈美香は台所で作業をしている中井に向かつて言った。

「それ酷くない？ 私、そんなに不謹慎？」台所から返答が帰ってくる。不満の声を感じて取れる。

「そこまで殺人事件に興味津々だね。ああ、なるほど。あいつはいつもこう思ってたのか」

「私、事件に遭遇してないし。見てないし。当事者じゃないし」そう言いながら中井がハーブティーを淹れて戻ってきたので、起き上がる。カモミールというものらしいが、コーヒー派の奈美香にはよくわからなかった。ティーカップの一つを奈美香に渡すと自身もベツドに腰掛ける。

「で？ で？ で？」

「わかったわかった。話すから」奈美香は苦笑しながらもこれまでの経緯を話し始めた。

美術館で首のない死体が見つかったこと、カメラには不審な人物の出入りは確認できなかったこと、その他、死亡推定時刻や警備員の見回りなど、知っている範囲の情報はおおかた話した。

話した後で、情報漏えいだな、と思つたが仕方ないと言い聞かせた。中井なら誰にも漏らすことはないだろう。こんな話題で盛り上げられる人間はそつくない。

「はあ。要するに密室つてわけね」

「え？ ああ、そうか。かなり広義の意味になるけど。穴が大きすぎる気はするけど」

「この場合、やっぱり、どうして首を切ったかより、どうやって出入りしたかだよ」

「やっぱりそうなるか……。絞殺らしいから、首を切ったのは絞殺痕を誤魔化すためだと思っただよ。身長を割り出せないようにしたのかと思っただけど、絞殺は身長関係なく水平に後がつくらしいのよ。切る意味なし。それに、どうにもカメラの方がね。もしかしてそっちと関係あるのかなあと思ったりもしたんだけど」

「首とカメラ？」

「うん」

「ないんじゃない？」

「やっぱり？」

「首がその場に残ってた時点で、絞殺痕を消すくらいしか用途はないと思うけど。それとも、頭と胴体が違うとか？」

「あ、それ面白い」

「すぐわかるけど」

「現代科学の進歩が推理小説の可能性を狭めたよ。もちろん、現実では大歓迎だけど、小説を書くとなると……。リアルを求めると書きにくくなっただろうなあ」

「だからこそクローズドサークルが出てきたんだろうね。孤島のホテル。島と本土を行き来するボートは壊され、電話も通じない。なぜか客に医者がいて死亡推定時刻くらいは割り出せる。その時刻にはなぜか全員にアリバイが。うわあ、リアルの欠片もない」二人は笑いあう。

「ま、どうせ今回も猪狩くんがちゃちゃっと解決しちゃうんでしょ？」

「ちゃちゃつと、ねえ……。使わないわよ、今日日」

「いや、それこそ使わないでしょ」

「まあ、あいつなら解決するでしょうね」言い返されたのがちよっ

と気恥ずかしくて、中井の話を無視して話題を変えた。「けど、いつもあいつに先を越されるのは気に食わないけどね」

「そもそも、警察が解決するのが理想だよ」

「手伝いよ、手伝い。普段だって、一般人の目撃情報とかがないと警察だって何もできないでしょ？ それと同じよ」

「それ、無理がない？」

「いいのよ、それくらい。そのくらいが丁度いいのよ」

「彼、頭いいから、まあ、有りかもね」

「ふん。所詮H大落ちよ」

H大落ち。地元ではH大が周辺大学のトップであり、その次にややランクが下がってO大、そしてまたさらに下がってその他の大学が多数ある形となっている。

そのためH大、O大の二強状態となっていて、しかしそれでも両者の間にはそこそこの隔たりがある。だいたい、地元で成績のよいものはH大とO大を受けるため、後期試験でO大に入学した者はH大落ちなどと言われる。猪狩と奈美香はこの後期試験入学者である。ちなみに蛇足だがO大の後期試験は実はなく、センター試験の得点のみとなっている。だからこそ、H大・O大の組み合わせが多いのである。

「そうそう、そこ。そこがわかんないのさ。何であんなに、いやまあ、ほとんど会ったことないんだけどさ、頭いいのにO大なの？」

「って話さ。まあ、奈美香もだけど」

「私はね、前日に三十九度の熱出したから」

「うわあ、運悪っ！」

「ほんと最悪。全く解けなかったから」

「で、何？ 猪狩くんも？」

「いや、あいつはまあ……。自業自得というか。まあ、半分は私のせいなんだけども……」

奈美香はその時のことを思い出して、顔をしかめる。

「どづいこと？」

「あいつ、最初の科目、受けてないのよ」

「はあ？ 何？ 寝坊でもしたの？」

「うん。あいつが悪いのよ？ 私が熱出して寝込んでたら、あいつメロン持ってお見舞いに来てさ」

「……なんてベタな」

「でもって、あるうことが私の部屋で勉強し始めたし」

「うわあ」

「風邪うつるって言っても『大丈夫だ』しか言わないし。知らないわよって言って私寝てただけだよ。そのうち『あ、やべ、帰らなきゃ』とか言って帰っていったんだけど。何時だったかなあ？ 真夜中ってわけじゃなかったけど、あいつ朝に弱いからさ。母親譲りなんだよね。基本のおばさんは朝起きないから、起こしてくれないのよ。で、アウト。サヨナラH大って感じ。けどね、腹立つことにね、一科目受けてないのに、成績開示したら、あと一点だったっていうのが、ね」

「……嘘でしょ」

「嘘のようでほんとの話。浪人すると思ってたけど、すんなりO大行くとって言うからびっくりしたわ。ね？ 半分は私が悪いけど、基本的にあいつの自業自得なの。って何よ、気色悪い」

奈美香が言い終わる頃には中井は何やらニヤニヤとした表情で奈美香を見ていた。獲物を見つけた痴漢もこんな感じだろうか。

「いやあ、いいなあ、って思ってたさ。それだけ奈美香のこと心配してたんでしょ？ いいなあ、愛を感じるわ」

「何言ってるのよ」そう言ってティーカップに口をつける。若干顔が火照っているのを感じる。愛だなんて、冗談冗談。

「いやいや、いいなあ。二人っていつから付き合ってるの？」

吹き出すのは懸命に我慢した。そんな漫画みたいな場面はあつてはならないと、そんなことをしては中井に笑われるだけだと言いつつ聞かせた。

「付き合っていないし。あんな唐変木」中井を睨みながら、落ち着こ

うともう一度ハーブティーに口をつける。

「はは、唐変木ね。でも好きなんですよ？」

不覚にも少し吹き出しそうになって、そうはなるまいと無理矢理飲み込んで、咳き込んでしまった。落ち着いたところで中井を睨みつける。

「……私と康平は姉弟みたいなものだし」

「ああ、わかる。幼馴染ってそういうものだもんね。その距離が縮まらなくて恋に悩む乙女……って、漫画じゃあるまいし」

「あの、何か勝手に盛り上がってない？」

「もう大学生なんだよ？ 苦節十ウン年の恋、さつさと実らせないと。恥ずかしいよ、大学生にもなって」

「あのねえ、私だって彼氏の一人や二人いたし」

「どうせアレでしょ？ 告白されて何となく付き合っつて、けど猪狩くんのが気になってすぐ別れちゃったんでしょ？ 乙女かつての！」中井は演歌歌手のように握り拳を作つて熱弁している。

なにやら暴走気味である。熱が入りすぎだ。勝手に決め付けないでほしい。これ以上喋らない方がいいかもしれない。

「その様子だとクリスマスも予定もなし？」

これ以上、絶対喋つてやるもんか。

「おうおう。だんまりかい。いいよ、じゃあ、猪狩くんに奈美香が君のこと好きだよって言つてやるんだから」

「ああっ！ 私のケータイ！！ いい加減にしてよ！！！！」

「これを返して欲しくば、猪狩くんをクリスマスに誘うことだね」仲居は携帯電話についているストラップを持って本体をぶらぶらとさせている。数年前に買ったブドウ人形とかいうストラップである。ここで、猪狩が買ったものだなんて言ったら、大変なことになる。

「……ああ、もうわけわかんない」

考えるのがいやになって、奈美香はその場に大の字になって倒れた。

2、

「うおい!!」

「奇妙な声を出すな」 蠅でも見つけてしまったかのような表情で鬱陶しそうに猪狩は言った。

「何か、最近ぞんざい過ぎないか？」

「何が？」

「俺の扱い」

「ああ、何だそのことか」

「何だとは何だ！ 何で俺だけ仲間はずれなんだよお！」

ここは駅前のドトールである。ガラス張りの開放感のある店舗だが、スーツ姿のサラリーマンが歩く姿を眺めていたところで、何の感慨もない。かく言う自分たちもスーツ姿なのだが。

脈絡もなしに面白い話をしると藤井が言うので、事件の話をしたところで先ほどの奇声を上げたのだった。

「お前みたいなキャラの宿命だろ。木根って呼んでやるうか？ 川

上？ 千田？」 ぬるくなったコーヒーを飲みながら猪狩は言う。猫

舌なので冷めているくらいが丁度よい。

「ふざけんなよ。誰が好き好んでこの立ち位置にいますってんだ

よ？」

「何、お前そのキャラ変えたいのか？」

「俺はなあ、もっと集団のトップっていうか、中心になりたいんだよお！」

猪狩は高校の頃を思い出す。が、あまり変わっていない、目立つが中心というよりはいじられキャラの色の方が濃かった。

「奈美香がいる限り無理だな」

「くそっ……」

「諦める」

「くそっ」 藤井は繰り返す。「何、じゃあ、事件は進んでるの？」

どうやら諦めたようで、話題を事件へと変えた。

「知らない。警察の仕事だし」そう言って外に視線を走らす。人々が首を窄めて少しでも寒さを凌ごうとしながら歩いている。やはり、面白くない。

「言うと思ったよ」

「そう言うと思ったよ」

「何も聞いてないの？」藤井はホットドックを頬張りながら尋ねてきた。食べながら喋らないでほしい。

「少しは聞いた。けど、あまり突っ込みたくない。奈美香は勝手にやってるかもな」

「あいつもよくやるよな。昔からああなの？」

「いまさらな質問だな」

「いいだろ、別に」

「まあ、何にでも興味持つやつではあったな」

「へえ。それにしても、幼馴染なんて人種がほんとにいるなんてなあ。漫画くらいだと思ってた」

「何をいまさら」

「いや、ね。この時期になると、女の子が恋しくなるんだよ」

「……お前、奈美香が好きなのか？」

「はあ？ 違うつて。強い女の子はパス。羨ましいって話だよ。人の女に手え出したりしねえよ」

「……ちょっと待て。俺と奈美香は付き合ってるぞ」

「知ってるよ」

「じゃあ……」

「だって、そういう次元とつくに越してるだろ」

「意味がわからん」

「あ、そ。わかんなくていいんじゃない？ ただ、自覚はあるよな？」

「ないよ、そんなの」あるはずがない。

「だって、”人の女”って言って、自分だと思っただろ」

そう言った藤井の表情はニヤニヤしていて、下品で、無性に腹が

立って、とりあえず頭に一発拳骨を入れた。

「ってえ……。わかったよ、もうこの話なしな。それより事件のこ
と教えるよ」

「ったく」そう言いながらも猪狩は事件のことを話した。とはいえ
自分自身たいして知っているわけではない。それに、途中から藤井
が考えることを放棄して上の空になりつつあったため、話すのが嫌
になった。

「おい、寝るな」

「……ん？ いやいや、寝てない。で？」欠伸をしながら藤井は言
う。わざとやっているのではと思ってしまう。コーヒーを飲む。さ
すがに冷めすぎていて不味かった。

「ほんとかよ、カメラに映ってないって」

「らしい」

「ふーん。じゃあ、アレじゃね？ 犯人は複数だよ」

「ほう」

「実行犯をスーツケースに入れて……」

「吃驚人間ショーじゃないんだぞ」

猪狩はため息をついた。

第四章 非対称な解決と問題

1、

「今日も学外セミナーだった。」

「そこで思い出した。そういえば近くだったな、と。」

「どうしようか迷って、猪狩は美術館へと足を向けた。」

「実際のところ用事はない。だから、入場料を払うのももったいない。中には入らずに外を見て回った。すると裏口の方に人が集まっているのが見えた。どうやら美術館の職員らしい。新川の姿もあった。」

「新川さん」猪狩は少し迷って声をかけた。

「ん？ ああ！ ……えっと、猪狩君」

「ええ。こんにちは」

「今日はどうしたの？」

「いえ、特に用事はなかったんですけど。何やってるんですか？」

「裏口にはトラックが一台と、数人の職員がいて、何かをトラックに積んでいるようだった。」

「美術品の移動だよ。今度別の美術館に貸す作品がいくつかあったね」

「そうなんですか」

「うん。じゃあ、俺も忙しいから。ごめんね」

「いえ、お邪魔してすみませんでした。あ、最後に一つだけいいですか？」

「ん？ いいよ、何？」

「新川さんって、館長室の美術品について把握してますか？」

「うーん。把握、ね。美術品があることは知ってたけど。有名な話だしね。あれ、館長の私物なんだよ。けど、何かあるかとかは知らないなあ。すごい高い物ってのは知ってるけど。あまり入ったことないんだよ。館長に用事があったって、たいてい事務室で済ましちゃ

うから」

「みんな同じような感じですか？」

「さあ、どうだろう？ 要するにね、あそこは仕事場じゃないから。というか、二階で仕事をするこつてないんだよね。空き部屋と第二倉庫しかないから。ああ、でも、館長はよくあそこで仕事するらしいよ。ま、館長のデスクも下の事務室にあるから、そこで済むんだよね。だから、わからない。みんな同じようなものじゃないかな？ 把握できるとしたら岸さんか、田原さんか、それくらいだと思っ。もういいかな？」

「ええ、ありがとうございます」猪狩は頭を下げる。新川が手を振つて去つていつた後も猪狩はしばらく様子を見ていた。

岸が指揮をとつていた。他は五人ほどでが美術品を慎重にトラックに積み込んでいた。指揮をとつている岸自身もせわしなく動いている。

「新川くん、脚立知らないかな？ 棚の高いところにあるのが取れないんだ」三十代ほどの男が新川に尋ねる。

「あれ、倉庫になかつたですか？」

「脚立なら二階の倉庫だぞ」岸が答える。男は礼を言つて室内へと入つていつた。

一人手際の悪い女がいた。確か、事件現場にも居合わせたはずだ。何といつただろうか。

「こら、美作！！ 何やつてる！！」岸が女に怒鳴りつけた。そうだ、美作だつた。

美作は一人で絵画らしきものが入つた布に包まれロープで縛られたものを運ぼうとして、ふらふらしていた。落したりしたら、雪で濡れて黴が生えたりして大変だろう。

「一人で運べないなら運ぶな！！ 傷がついたらどうするんだ！！」

「は、はいっ！ す、すみません……」

新川が助け舟を出して二人でそれをトラックに積み込む。美作はバツの悪そうな顔で頭を下げていた。

「リストラ最上位、ね……」猪狩はつぶやいた。

「何か用かね？」ふと後ろの方で声がした。そこにはふくよかな、言葉を悪くすれば中年太りした男がいた。くだんの事件のときに猪狩を事件現場に押し倒した男である。たしか新川から名前を聞いていたはずなので、懸命に思い出そうとする。

「えっと、田原さん、でしたっけ？」

「ん？ そうだが、会ったことがあったかな？」

「あの、館長の事件のときに……」

「……ああ、あのときの。何か用かね？」何とはなしに成金という言葉がイメージされるような体型と喋り方である。

「いえ、近くを通ったので」

「ふん。だったら是非ここにお金を落としていつてもらいたいものだが」田原はふてぶてしい態度で言った。どうにも好きになれないタイプだ。

「すみません」とはいえ、冷やかしなのは事実であるし、猪狩は素直に謝った。

「全く、警察は何をしてるんだ。さっさと犯人を捕まえてしまえ」

「心当たりとかないんですか？」

「心当たりも何も、私は岸しかいないと思つとるがね」

「岸さん、ですか？」伊勢から岸の横領の話聞いていたから、そんなに納得できたが、ここで知らない振りをしていないと、いろいろと面倒なことになりそうだと思ひ、興味をそそられたようにして尋ねた。

「詳しくは言えんがな。やつには動機がある。館長とは三十年以上の付き合いらしいが、よくもまあ……」

「館長はどんな人だったんですか？」

「どんな、ね。まあ、お人よしだよ。こんな金にならん美術館なんか畳んでしまえばいいのに。……まあ、私も職がなくなつたら困るがな。岸のことにしても、さすがに最後はもめてたが、最初は疑いもしなかった。おっと、何があったか言えんから、君は何のことか

わからんだろうが。それに、美作だって、普通ならクビだ。見たか、さっきの？ 美術品をあんなぞんざいに扱っておつて。悪意がないのも厄介だな」

「館長は彼女をクビにしようと思わなかったんですか？」

「館長はな。岸や私はさんざん言っていたがな。怒りこそしたが、頑張ってるからと言つてな。愛のムチというやつか？ ふん。そろそろいいか？ 私も忙しいんだ」

「あ、すみませんお時間取らせて。……最後に一つだけいいですか？」

「何だ？」

「田原さんは館長の美術品について把握してましたか？」

「把握、の意味がよくわからんが、だいたい作品は知つとるよ。それがどうした？」

「事件の後、館長室に入りました？」

「いや、警察がずっといたし、その後もどうにも縁起が悪いとか、気味が悪いというか、とにかく入つたらんが。それがどうした？」

「いえ、ちょっと。今度こそ、お時間とらせてすみませんでした」
猪狩はお辞儀をした。

2、

「絶対に、ない」

伊勢は困惑していた。彼の証言如何で事件の可能性が広がるのだが、どうにも譲らない。譲らないというのならば真実なのだろう。だが、そうすると、どうやって、がわからなくなる。

「本当に事務所の窓は確認したんですね？」伊勢は警備員の加藤に尋ねた。白髪がだいぶん増えて、全体として灰色の髪の毛で、皺も老いたというよりは貫禄を感じさせ、石原軍団にでもいるのではと思ってしまうような姿だった。

この話は以前にも聞いていたことだ。しかし、どうにも信用でき

なくともう一度確認しているのである。

「だから、何度も言ってるだろう」まだ二回目だ、とは突っ込めなかった。確かに重複しているのは事実だ。「職員がいなくなつて、八時頃か？ 事務所の窓は全て私が確認した」

「その後は？」

「その後？ 後は見とらんよ。誰が開けると言っただ？」

「いえ、そうですね」可能性はまだ残っている。だが、それはあまりにも非現実的、というよりも非合理的に思えた。

「夜中は誰も見てないんですね？」

「私はな。荒井くん、君はどうだ？」腕組みをしながら回転式の椅子を少し回して、荒井の方を向いて尋ねる。彼は加藤と比べて丸い印象を受ける。太っているわけではないが、ふっくらとした体つきで、丸い眼鏡を掛けていた。

「僕ですか？ 僕も見えてないですよ」二人とも同じ年代に見えるが、どうやら加藤の方が年上らしい。「聞いてもいないです。事務所の窓が開いたら気づきますよ」

事務所の鍵はまだ納得できる。だが、室内で誰も見ていないというのわかる。だが、それがイコール誰もいなかったとするには早計すぎる。特に”聞いていない”というのは信憑性に欠ける。

「ずっとここにいたんですか？」

「ええ。あ、でも加藤さんが戻ってきてから、そうですね一時からいんですか？ 仮眠取りましたけど」

「それまでは何も見てない、聞いてないと」

「見てない、っていうか、カメラ越しですけどね」

「加藤さんも見回りのときも、この警備室でも、何も見てない、聞いてないということですね？」

「そうだと言ってるだろう」

「館長が上にいたのは知っていましたか？」

「ああ、知ってたよ。さすがに黙って泊まっていかれては困るからな。いつも言ってもらってるんだ」

「言われたとき、何かいつもと違う感じはしませんでしたか？」
「さあ、特に感じなかったが。というより特に見てなかったな。
こんなことになるかわかってたわけじゃあるまいし」

この二人の証言で、かなり丈夫な牙城が築かれてしまった。犯人はどつやつて彼らの目をかいくぐったのだろうか。

例を言つて美術館を後にする。玄関を出たところで、何と矢式奈美香に出会った。おそらく、事件に首を突っ込みに来たのだろう。

「あ、こんばんは」

「やあ、どうしたの？」

「……美術館つて、五時までなんですわね」

「ああ、なるほど」伊勢は左手の時計を見た。今はもうすぐ六時になるつかという頃だ。玄関には堂々と”閉館”の看板が出ている。

ふと、奈美香の視線に気がついた。何かを訴えるような、餌をねだる小動物とでも言おうか、そんな顔だった。

「はあ、わかったよ。教えるかどうかは別として、とりあえず、どこか行こうか。お腹へってないかい？」

2、

奈美香が、帰れば夕食があるはずだからというので、軽めの物をと駅前のドトールへと向かった。伊勢はホットドックとコーヒーを頼んだが、奈美香はコーヒーだけだった。

「私、ちょっと思いついたことがあるんです」

「ほう？」伊勢は笑顔で、さらに言えばとぼけたような顔で聞き返す。

「その前に聞きたいんですけど、事務所の窓の鍵つて、どうなってますか？」

「そのくらいなら……。八時頃に警備員が施錠を確認してるよ」

「その後は？」

「朝まで確認されてないよ」

「そうですね。だとすると、この犯行には二つの可能性があります。」

警備員二人が共犯だったという可能性と、館長自らが犯人を招き入れた可能性です」

「だろうね」そう、その二つくらいしか可能性は思いつかない。

「あれ？ 気づいてました？」

「まあ、それくらいしかないだろうなって」

「うーん。最近腕が鈍ってきてるなあ」

「腕って何の？」伊勢は笑った。

「就活以外に頭が回っていかないんですよ」奈美香は目を細めて「ヒーを飲む。」

「その方がいいよ」

「でも、ちよつとだけ。まず、警備員共犯説ですけど。これは状況だけで言えば有り得ますけど、考えにくいですよね」

「うん。自分たちしか疑われる人物がいないからね」

「それを逆手に取ったとしても……考えにくいですよね」

「疑われるリスクの方が高い」

「館長が犯人を招き入れたとすると、問題はどややって警備員をかいくぐったかと、どうして招き入れたか、ですね」

「僕個人としてはね、あの警備員は怪しいと思う」

「共犯説支持ですか？」

「いや、そうじゃなくて。実はどこか抜けてると思うよ。”絶対に”ないって断言してるからこそ、うっかり寝ちゃったとか、実はそ

こまで真面目に見てないとか。だから、どちらかという館長解錠説を支持するね」

「問題は解錠の動機ですね」

「そう。内緒の話をするには警備員が邪魔なんだよ。話を聞かれることはなくても、そこまで行くのが一苦労だ」

「それに、首の問題もありますよね」

「そう。今考えられるのは、君が言った通り、絞殺痕を消すために首を切断した。目的としては身長割り出しを防ぐため。実はそんなことできないんだけど、犯人はそれを知らなかった。こんなとこ

る？」

「そうですね。ただ、もう一つ思いついたんですけど、犯人は本当は首を持ち去りたかつたんじゃないかって。つまり、あの状況は不完全だったっていうことです」

「何かのために首を持ち去ろうとしたけど、寺坂由美が来てしまったためにそれができなくなった？」

「別に寺坂さんじゃなくてもいいんです。いつ首を切ったかがわからない以上、警備員に見つかりそうになったのかもしれない。むしろ開館中にそれをするのは危険じゃないですか？ だとすると、夜中に警備員に見つかりそうになって、首を持ち出すのは断念して逃げ帰ったと考える方が妥当だと思います」

「切断されたのが死後数時間っていうのを忘れないでね」

「ああ、そうか。でも、有り得ない話ではないと思います。寺坂さんが来るまで血が固まらなかったわけじゃないですから」

「確かにね。けど首を持ち去ってどうするのさ？」

「そこなんですよね。一番の使い道は、顔をわからなくして、死体を誤認させることなんですけど、科学技術が発展した今じゃあ……」

「でしょ？ 指紋鑑定にDNA鑑定。他に何かあるかい？」

「いえ、今のところは……。悔しいなあ」

「そんなことで悔しがってないで、就活頑張った方がいいよ」

3、

数日後、岸が無断欠席した。妻と二人暮らしで、彼女は入院していたらしいから家には岸一人で、電話も誰もでない。そのため、田原利昌は不機嫌を纏って美術館を出た。

彼は、いわゆるメタボな体を揺らしながら愛車へと乗り込む。岸の家を知っているのは自分だけなので、様子を見に行かなければいけない。

「……つたく、面倒なことを」

もしかして逃げたか？ と思わなくもなかった。何せ、彼は経費

の着服が疑われている。というよりも、ほとんど確定事項であった。本人は必死に否定していたが、疑いの余地はなかった。そこに館長の死だ。疑わない方がおかしい。

「普通にやっていたらナンバー2だったものを……」

副館長の肩書きこそ寺坂由美が持っていたものの、実質岸が館長の補佐を担っていた。だからこそ、つい経費に手を出してしまったのかもしれないが、まったくもったいないことをしたものだ。

それにしても、経営の苦しい美術館の経費に手を出す神経が理解できない。逆に経費に手を出したから経営が悪くなったのか。

彼の家は中央区の外れの高級住宅街である。もともと、東京と比べS市の高級度合いなどたかが知れているが。

岸の家に着き、車を降りる。彼の家は真つ暗でどうやら留守らしかった。だが、もし逃げたのではなく単純に体調不良などであればもう寝ているのかもしれない。そうだとしたら、連絡をよこさなかつた戒め意味も込めて起こしてやろうかという意地悪な思いがわきとりあえずインターフォンくらいは鳴らしてやろうと門をくぐる。

ドアの前に来て異常に気がついた。ドアストッパーが引つ掛かつて、ドアが閉まっていけないのだ。いつからこうなっていたのだろうか。鍵を掛ける関係上、外に出るときにこうなることはまず有り得ないから、岸は中にいるということになる。だが、それだと、岸は一度家を出たことになる。それに、こんなことに気がつかないことなどあるだろうか。

「……岸？」

二時間ドラマで、わざわざドアノブに手を掛ける主人公が馬鹿だと思えていなかったが、さすがにこの場合に見過ごそうとは思えなかった。

「入るぞ？」

手探りで廊下の照明のスイッチを見つけて点灯させる。人がいる雰囲気を感じ取れない。やはり、いないのだろうか。

あまり、人の家に無断で入り込むのはよい気分ではない。居間だ

け見て帰ろうと思い、照明をつけ、絶句する。

「岸！」

そこには頭から血を流した岸が倒れていた。

4、

一週間ほどがたった。結局、ドトールで一度伊勢と話したものの、それから事件についての連絡はなかった。さすがに何度も一大学生に頼っているのは情けないと考えたのだろう。それに、頼られてもこちらが困る。何度も言うが困る。何がと聞かれれば、答えに窮してしまいが、困る。そういうことにしておく。

街はといえばこの時期特有の喧騒に包まれているが、猪狩にとつては関係がない。ここまでセミナーに追われていると虚しくもなってくる。それでも気を抜けば来年の今頃どうなっているかは容易に想像がつくので、どうしようもない。

毎日スーツを着ているわけではないが、それでも着る機会が増えてきた。そのような一週間だった。年が明けるとさらに多忙になってくると考えると恐怖すら感じる。

事件についてはこのままフェードアウトしていくものだと思っていた。

……思っていた、のだが。

「殺された？」

「らしいわよ」

偶然にも同じセミナーに奈美香が参加していた。二人は隣同士で座ると、奈美香の方から話題を振ってきた。

容疑者の一人、岸義行が殺されたというのだ。驚かずにはいられない。

「自宅で鈍器で殴られていたらしいわ」

「マンション？」

「いや、一戸建てだって。奥さんは入院中、息子はもう一人立ちしてるから、誰もいなかったみたい」

「……まさか、密室だったりしないよな？」

「まさかでしょ。そんなんじゃないわ。いたって普通の状態だった。けど、詳しくは教えてくれなかったわ」

「そう……」

「ああ、もうやめ。止めましょ、こんな話」

「お前が振ったんだろっが」

「うるさいわねえ」

そう言っただけで奈美香は黙り込んでしまった。それでも、奈美香は何か言いたそうに猪狩の方をチラチラと見てきた。

「……何だよ。まだ何かあるのか？」

「いや、事件の話はもうない」

「じゃあ、何？」

「別に……」

「沢尻エリカか」

「古いわよ、それ」

「うるさいな。早く言えよ」

「別に。明後日、暇かな？　と思って」

「明後日？　確か、セミナー入ってたぞ」

「あ、そう」奈美香はそっぽを向き、セミナーが終わっても口を利かなかった。

彼女が不機嫌になる理由が猪狩にはわからなかった。

5、

二日後、またセミナーである。いい加減にげんなりしてくるが、それでも仕方がない。手帳にまだ空白があるだけまだマシである。以前内定者の手帳を見せてもらったことがあるが、二月三月の予定はおぞましいものがあつた。

街中まで出てきたついでに、セミナー前に猪狩は警察に顔を出した。というよりも、このために早く出てきたのである。

「あら、珍しい。君の方から来るなんて」

「いえ、ただ、気になったことがあって」

毎回、このようなことの繰り返しのような気がする。この行動については自己分析しても答えは出なかった。気になったこと自体が不思議不可思議摩訶不思議である。別に、この自己分析は就活に影響しないから気にしないが。

「何だい？ あ、ちょっと待って。ここはマズイ」そう言って伊勢は席を立つ。

連れてこられたのは休憩所だった。幸い人はいない。誰も聞いていなければ、”一般人に情報を漏らす”ことも何とかなるのだろう。「で、聞きたいことって？」

「館長室の美術品、あれって館長の私物なんですよね？」

「うん、そうだよ。しかも展示してあるものより価値が高い。たぶん君でも知ってるんじゃないかな、っていう作者の作品とかだしね。もちろん、そういう人の作品の中では相当安いけどね。有名どころは億万長者しか買えないよ」

「盗まれたりしてませんか？」

「……よくわかったね」伊勢は目を細める。「一つ絵が盗まれてたよ。左側の壁が二つしかなかったんだけど、盗まれてた。価値あるものだから五つしか持ってないのかと思っただけだよ」

「そこだけ非対称でしたから」

「え？」

「いえ、何でもありません。えっと、事件の日の朝の職員のアリバイってわかりますか？」

「朝？」

「ええ、朝、出勤してから、由美さんが悲鳴を上げるまでの。犯行時刻と関係ないからって聞いてないことはないですよ」

「もちろん聞いているよ。ただね、だいたい一緒なんだよ。みんな事務所にいた。岸が一番最初に来て、新川が次に来た。その間の行動はよくわかってないけど、その後は互いが事務所にいたと証言している。他も似たようなものだよ。寺坂由美だけが、微妙なんだ。出

勤して一度事務所に顔を出した後は、二階で作業をしていたらしい。現場の二つ隣の部屋だ。ただ、どの道、夜中に犯行を行えなかったのは確かだ。カメラが証明してるんだから」

「充分です。あ、あと岸さんが経費を横領していたらしいですけど、お金に困っていたんですか？」

「ああ、妻が入院していてその費用と、まあ、ギャンブルで少し借金があったみたい」

「少し、ですか」

「ギャンブルでやらかしたにしては少しだよ」

「最近口座に金が振り込まれたりしてないですか？　もしかしたら二回かも」

「……ビンゴ。二回目はたいした額じゃなかったけどね。わかると思うけど、岸がその絵を盗んだ可能性が高い」

「二回目は手付金、ですかね？　三回目は、いや本来二回目か。それは直接で、そこで……」

「何言ってるの？」

「あ、いえもう大丈夫です」

「そう？　それにしても君も残念な人だなあ。こんな日に就活なんて」

「こんな日？」

「おいおい。今日が何の日かわかってないの？」

「……………あ」

猪狩は曜日感覚こそあれど、基本的に日付は見ない。曜日ほど行動パターンに影響がないからだ。いちいち今日が何日かなんて覚えていない。

「伊勢さん。もう一つ聞きたいことができました」

第五章 非対称な犯人と結末（前書き）

第四章が第五章になっていることに三日間気が付かなかった……。

第五章 非対称な犯人と結末

1、
全く、何年同じことの繰り返しか。

いつもなら平気なのに、なんともないのに。こういう日に限って、尻込みしてしまう。押しが弱い。そんな自分に嫌気がさす。中井の呆れ顔も容易に想像できて、さらに気分が沈む。彼女に言われなくてもやるうとしてはいるのだ。

ただ、自販機で硬貨を入れて買おうか迷っているうちに硬貨が戻ってきてしまうだけなのだ。そんな風にして時間だけが過ぎていつて、結局間に合わない。

母は笑って馬鹿にしてきた。無性に腹が立つたけど言い返せなかった。

怜奈でも呼ぼうか。彼女だってたぶん今日は何もないはず。

……何かあったら嫌だな。

全てはあいつが悪いんだ。どうせ何もわかってない。無神経に「セミナーがある」だなんて。神経がない人間を想像して可笑しくなったが、すぐに気持ちは沈んでいく。

セミナーの後は？ 別に何も無いんでしょ？ とは聞けなかった。100%何も無いはずなのに。

「はあ……」

自然とため息が出る。

インターフォンが鳴った。こんな時間に誰だろうか。

「奈美香ー！」

私？ 一体誰だろうか。

「だれー？」

「お友達」

怜奈だろうか。それ以外に思いつく人物は……たくさんいた。自分の友人網は伊達ではない。ただ、本当に押しかけでこんな時間に

やって来そうなのは怜奈くらいだろうとは思う。

階段を下りて玄関へと向かう。そこにいたのは、

「メリークリスマス」

小さいケーキの箱をぶら下げた、あいつだった。

何となく幼稚な、何となく中学生みたいだと思った。

でも、

「メリークリスマス」

こいつだから、許してあげよう。

2、

「なあ、ゴツホの絵が高いのはどうしてだと思っ？」

急に何を言い出すのか。こういう突拍子もない会話がたまにある。

奈美香はベッドに腰掛け、猪狩は奈美香の机の椅子に座って回転式のそれを左右に回している。無愛想で大人びているくせに、こういうガキみたいな一面もあるのだと改めて思った。

「そりゃ、絵が上手だからでしょ」首をかしげながらも奈美香は答える。

「じゃあ、ピカソの絵は？」

「だから、絵が上手だからじゃないの？」

「ピカソの絵が上手だと思っの？」

「それってピカソに失礼よね？ 人それぞれなんじゃない？」

「だろうね。俺自身はどうとも思ってない。俺が言いたいのは、価値と価格は非対称だっってことだよ」

「は？」言っていることがわからず、奈美香は思わず首を捻った。

「ゴツホの絵が高いのはそれがゴツホの絵であるからだし、ピカソの絵が高いのはそれがピカソの絵だからだよ」

「わかるようでわからない」

「例えば、ゴツホの絵の贋作は本物より安いよな？」

「当たり前でしょ。偽物なんだから」

「そこには贋作であるという査定は入っても、その絵の良し悪しは

見られてないんだよ」

「あー……」わかりそうで、やっぱりわからない。

「もし、本物よりも優れた技術で描かれた贋作があったとしても、それはやっぱり贋作であって、本物より価格は低い」

「本物より優れた贋作って何よ？」

「例えば、自身の最高の作品が一千万の評価を得ている画家の絵を、自身の最高の作品が一億円の評価を得ている画家が真似たら、どうなる？」

「うーん。難しいわね」

「本物より優れた贋作ってのはそういう意味。実際どっちなんだろ
うな？ 自分で言って、自信がなくなってきた」

「何よ、それ」

「とにかく、最初は全うに評価した人がいたんだろうね。それが、
次第に膨れ上がって、価格が一人歩きして価値を大きく上回ったん
だろうね。数千円で買った絵が、数千万になったって話は結構ある
だろ？ その数千円が本当の価値だ、までは言わないけど。そうい
うこと」

「まあ、とりあえずわかったわ。それがどうしたのよ？」

「別にどうも。ただ、思っただけ」

「あ、そ」

それきり会話が途切れる。こういう会話をした後は満足するのか、
基本的に猪狩は喋ろうとしない。元が大人しいので特に気まずいと
いうことはないが。

「そういえばあんた、ここ知ってるの？」 適当な話題を見つけて猪
狩に振る。

猪狩が買ってきたケーキは予想外なものだった。どうせそこらの
名もなき（とても失礼ではあるが）ケーキ屋だと思っていたのだが、
S 駅内に入っている有名なケーキ屋だった。

こういったものに疎い猪狩が知っていたとは到底思えない。

「今日初めて知った。伊勢さんに聞いた」

猪狩のその言葉に奈美香はピクリと反応した。聞き出したい衝動を必死に抑える。いくらなんでも、クリスマスにまでその話題はしたくない。

したくない、のだが。

「……我慢しているのが見え見えだぞ」

すっかり見透かされた。

「事件、わかったの？」

「回答は出した。合ってるかは知らない」

「じゃあ、聞かせてよ」

「……本当に？」

「うん。すつきりしない」

こんな日にこんな話をするのはどうかと思うが、すつきりしないのは事実だ。どうせなら聞いてしまおう。どの道そのうち会話に困るのだ。先ほどみたいになよくわからない会話を除けば、猪狩はこちらから話さないと喋らないのだから。

「じゃあ、結論から言おう」

「ダメ」

「……………おい」

「だって、つまらないじゃない」

「わかったよ。時系列順に話そう。」

まず、館長・寺坂陽一の死亡推定時刻は夜中の十二時頃。館長以外の人間はいなかったと警備員の証言がある。彼の警備をかいくぐれば話は別だけれど。

そして、防犯カメラでもそれは確認できる。といってもカメラがあるのは出入り口二つと展示室だけ。とにかくそれでは出入りした人間を確認できなかった。

出入り口二つ以外から入れそうなのは事務室の窓のみ。ただ、高くて、背が高くないと入るのは困難。出たときも窓を閉めるのは難しい。もちろん鍵は閉められない」

「そもそも、前の晩の八時頃に警備員が施錠を確認してるわよ」

「あ、やっぱり？ まあ、そうだろうとは思ってたけど。とりあえず置いておこう。」

朝、一番先に来たのは岸さん。ちなみに蛇足だけど彼は長身だ。その次に来たのが新川さん。まあ、その後はなানাあだけど気にしなくていい。みんな事務室で仕事をしていたけど、副館長の由美さんだけは二階で作業をしていた、と。その後、しばらくして館長室を訪れた由美さんが館長を発見したと

「こうしてみると岸さんがとても怪しいんだけど……」

「そう。長身の彼なら、事務室の窓から侵入し、館長を殺害することは可能だったはずだ。鍵が開いていて、警備員をかいくぐれば、の話だけど」

「けど、殺された」

「そう。この事件をどう見るかが問題。一つは岸さんが犯人ではない可能性。もう一つは岸さんが犯人で、それを知った別の誰かに復讐された。そして、岸さんが犯人で今回の事件とは無関係に殺された。三つ目だと俺の出る幕がないからとりあえず除外するよ。」

岸さん犯人説を考察しよう。彼が犯人だとする。とすると不自然な状況が出来上がるんだよ」

「鍵が開かない」

「それもある。けど、例えば、何か理由があつて館長と岸さんが内密に話をしたかったとする。誰にも聞かれない場所として、館長室を指定して、内側から鍵を開けてもらう。これも十分不自然だけど。とにかく、彼が犯人だとする。彼は夜中に侵入して館長を殺害する。その後彼が取ったとされる行動はどちらかだ。血が固まるまでその場で待ったか、一度その場を去り、血が固まった頃を見計らつてもう一度訪れるかだ」

「後者じゃないの？ 一番最初に出勤して、窓の鍵を閉める。そして、館長室に向かつて館長の首を切断したんじゃないの？」

「まあ、二階にもトイレがあったから仮に血が付いてしまったとしても洗えるしね」

「え、トイレなんてあった？」

「あった。最初に俺たちがスタッフルームに入って真っ直ぐに。俺たちは左に曲がったけど、真っ直ぐにトイレの看板があった」

「よく見てるわね」

「お前と違って、血眼になって死体なんて探してなかったからな」

そこで奈美香は猪狩を睨む。どうしてこいつはこんな日にもこんな憎まれ口を叩くのだろうか。猪狩はおっと、といってわざとらしく口元に手を当てた。ちよつと腹が立つ。けれど我慢。

「けど、一番に来れる保障は何処にある？」

「あ……。でも早く来ようとすれば来れるんじゃない？」

「けど、早く来すぎるとカメラに映る。言い訳しようと思えば、できるわけだけど、警備員もいる」

「それじゃあ、血が固まるまで待ったの？」

「正気じゃないな。自分が殺した相手と数時間も同じ空間にいたくない。外に出れば警備員だ。俺なら返り血承知ですぐ切っちゃうけどな。血まみれで警備員に遭遇しようが、綺麗な服装で遭遇しようが、見つかったらアウトだし。少なくとも二度来るよりはリスクが低い」

「そんなこと言ったら、誰が犯人だって一緒じゃない！」

「そう。そこが今回のポイントだよ」

「ポイント？」

「ああ。とりあえず先に進もう。事件発生後の話だ。館長室の絵が一枚盗まれていた。そして岸さんの口座には結構な金額のお金が振り込まれていた。このことからわかることは？」

「岸さんが絵を盗んだ？ でも、カメラは？」

「カメラを気にせず絵を出し入れする機会が一度だけあった。この前、美術品を他館に貸し出したんだ。その時にはカメラを気にせず外に出すことができた。実際指揮をとっていたのは岸さんだったしね。つまり、倉庫に盗んだ絵を保管しておいたんだ。美術館の作品と紛れさせて」

「でも絵を盗んだってことは岸さんが犯人じゃないの？」

「さつきも言っただけど岸さんが犯人だとすると不自然だ」

「でも、その不自然って誰にでも通じるでしょ？」

「そう。まだわからないかな？」

「……わかんないわよ」

「じゃあ、次。岸さんの口座にはもう一回お金が振り込まれていた。それと、状況からして彼が絵を盗んだのは間違いない。けれど彼が犯人だとすると不自然だ」

彼女は腕を組んで考える。

まず、状況の整理。

防犯カメラ。

警備員の証言。

盗まれた絵。

切断された首。

二階、倉庫、トイレ……。

「……………え」彼女の脳裏にある答えが浮かんだ。しかし、それは到底考えにくいものだった。

「ちよつと待って！ 有り得ない！ そんな……………」

「有り得ないことじゃない。岸さんが絵を盗んだ、且つ、犯人ではない。そんな状況が成立する答えは一つしかない」

「……………自殺」

「そう、自殺。館長は自殺したんだ。経営苦かもしれない。岸さんは何の事情があつたか知らないけど、朝一で館長室へと向かった。そこで館長が首を吊っているのを目撃する。

そこで彼は一つの考えを思いついた。絵を盗もう、と。館長のコレクションは有名でも、内容を把握している人は少なかったみたいだし。いずればれるとしても、田原さんくらいしかわからないし、時間は稼げる。絵を倉庫に隠して、他の作品を貸し出すときに一緒に外に出す。館長の自殺は誰か他の人が見つければいい。そう考えれば、と事務室で仕事をしていたんだ。

そして、別の誰かが館長を見つけた。彼女は気が動転したはずだ。夫が自殺してしまった。すぐに誰かを呼ぼうとも思っただけだ。けど、ふと頭の中で警告がなった『自殺じゃ保険金は降りない』と。だから、首を切断して他殺に見せかけたんだ。首を切断する動機を持つのは彼女しかない」

「由美さんが首を切ったのね。でも首を吊ったロープは？ どう処分したの？」

「簡単だよ。倉庫に放っておいたのさ。というか、館長は倉庫のロープを使っただけじゃないかな？ 何かと必要だろ、たぶん。」

おそらく、暖房用のパイプにロープを括っただけだ。ソファのちよつと前に吊るしておけば、蹴る椅子がなくても前のめりになるだけで首は吊れる。倉庫っていうくらいだから脚立くらいはあるだろうから、由美さんでも降ろせる」

「ちよつと待つて。てことは、みんながいる中で犯行を行ったってこと？ それじゃ、さっきといってること矛盾するわよ」

「岸さんをはじめ、他の人と由美さんの決定的な違いは、二階に行く理由の有無だよ。基本的に二階での作業はほとんどない。けれど当日由美さんだけは仕事があつた。そこだよ」

「うーん。まあ、由美さんにしたなら多少のリスクを背負つてもどうにかしなくちゃいけなかつたんだ。お金に困つてたのかな？ 続け」

「で、首のない館長を見つけて、事務所にいた岸さんはすぐわかつたわけだ。職員の中で長い時間席を空けていたのは由美さんしかない。自殺を見ている彼にしたら保険金のくんだりはずぐ理解しただろうね。それで、強請ろうと思いついたわけだ」

「二回目の振込みはそれで？」

「そう。伊勢さんの話だとたいした額じゃなかつたそうだから、前金みたいなものだろうね。残りは直接もらつつもりで、いや、もしかしたら由美さんが指定したのかも知れないけど、とにかく殺された」

「ちよつと待つて！ 岸さんだつて……」

「言つたもの勝ちだよ。やましいことを指摘されれば絶対に動揺する。それに岸さんは自殺を発見しただけ。由美さんは首を切断までしてるんだ。それにこれがバレれば保険金も降りない。もしかしたら絵を盗んだことは知らなかったんじゃないかな。それどころじゃなかっただろうし。共倒れしたとしても自分の方が大倒れするとしたら黙つてもらうしかないさ。絵を盗んだことがわかつてればまた違つたかもな」

「そつか。……そりゃカメラに映らないわけだ」

「そう、これでもいいは終わりかな？ 質問は？」

「ない。疲れた」ベッドに倒れこむ。

「全くだ。今日する話題じゃないな」

「何よ。あんたなんて今日が何の日か覚えてなかったくせに」

「……否定はしない」

「……ホント、私たちっておかしい」そう言つて奈美香は微笑む。

「右に同じ」

「ねえ、初詣は一緒に行こうか？」

「何だよ、急に」

「別に。嫌？」

「俺が朝苦手なの知ってるよな」

「うん」

それから猪狩は少し黙つた。彼の表情はよくわからないが、特に機嫌が悪いわけではないようだ。

「……わかつた。行こう」

少し前進したかな、と奈美香は思った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3105s/>

人生アシンメトリー

2011年4月18日20時55分発行